



ピッポ新聞

2008

6

No.232

子どもの本専門店

年間購読料(送料込み)1500円
編集・発行 伊藤俊男

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

今泉吉晴氏の 「ビアンキの名作『くちばし』」の 版の謎をとく」 掲載の経緯

今月号から動物学者の今泉吉晴氏に表題の連載をしていただくことになりました。そこで今泉氏が、なぜ本紙に掲載することになったか、簡単な経緯を記します。

ことのはじまりは、2006年3月に福音館書店から『くちばし どれが一番りっぱ?』という絵本が出版されたことです。この絵本は、ロシアのナチュラリストであり動物や自然の物語作家の第一人者であるビアンキの作です。これを福音館書店は田中友子さんという方の翻訳で出版しました。

この絵本がまったくの新刊絵本であったならば、読者としてはこれを読んで自分なりの評価をするだけで、あまり問題は生じなかったと思います。

ところが、このビアンキの絵本は1965年10月に同じ福音館書店の「こどものとも」の115号『くちばし』のタイトルで、既に出版されているのです。こちらの訳者は田中かな子さん(新版訳者の田中友子さんとは全く関係がない)です。福音館は同じ絵本を、訳者を替えて新たに出版し直したわけです。

この絵本は1965年に「こどものとも」の1冊として出版した以降も、こどものとも傑作集(ハードカバー版 1967年〜1971年)として、続いて1982年3月号こどものとも年中向き(普及版?)として、さらに1998年3月には「こどものともコレクション」64〜72」のなかの一冊として、ハードカバー版で重版され

てきました。

最初の『くちばし』の絵は、鳥のイラストレーターとして第一人者の藪内正幸さんの描いたものが使用されています。ですから、われわれ読者はこのビアンキ作の『くちばし』は、田中かな子さんの訳と藪内正幸さんの絵で親しんできたわけです。そこに突然、訳者と判型をかえて『くちばし どれが一番りっぱ?』が登場してきたのです。

この絵本で大きな比重をしめている絵(イラスト)は、同じ藪内正幸さんの絵(表紙絵と一部変更部分はある)をまったく同じ場面展開で使用しています。

最初は、訳者の名字も同じ田中とありましたが、判型を変えて重版したものかと思って手にとりました。しかし、読みだすと既刊のものと同文体がちがうのです。そこで訳者が替わったことに、はじめて気づいたのでした。

当然、読者としては、どうして訳者をかえたのだろうか?という疑問を持ちました。

これまで何度か重版してきた本を、突然訳者を替えて出版し直すということは、余程の問題点が生じたのだらうと考えるのが自然だと思えます。出版社は当然そのことを、読者に説明する責任があると思えます。しかし、それらしい説明はこの絵本には書かれていませんでした。

ようやく、最後の頁にある「編集部より」という説明文にたどり着きました。しかし、そこには新訳のどの部分に変更されたのかという、一方的な説明があるだけで、読者が一番知りたい「なぜ」訳者を替える必要があったのかという説明はありませんでした。

それどころか、そこには取って付けたように「『くちばし』という作品があったからこそ、本書を刊行することができました。田中かな子さんの著作権継承者の方に厚くお礼を申しあげます」と書かれていました。

これをよく考えてみれば、福音館書店編集部が著作権継承者に対して、訳者を変更したことへの言い訳としか聞こえません。もし、読者にもこれを報せたいのなら、前作『くちばし』の存在がどう新訳に役立ったかを具体的に書いてこそ、はじめて意味を持つのではないのでしょうか？

あくまでも、この場合は、福音館書店編集部がしなければならぬのは、著作権継承者と読者に、なぜ訳者を変更したのかという説明です。

次なる疑問は、この新訳は旧版の藪内正幸さんの絵をそのまま使用したことですか？

先の「編集部より」によりまずと、新訳は底本を変更したとあります。これは絵本のテキスト(文)がかわったということですから、当然使用する絵もかえるのが、絵本編集の常道ではないのでしょうか？ 今回の場合は、藪内さんは故人ですから、画家も替えるのが必然だと思います。

ぼくには、テキストが替わったのに、前作とおなじ絵をそのまま使うという理由がまったく理解できません。藪内さんは、田中かな子さんの訳したテキストを読んでイメージして描いたものなのです。前作の絵がそのまま通用するということは、訳者を替えて新版を出版する必要がないことをもがたっているではありませんか？

もし藪内さんが新テキストを読んでいたら、この場面の絵は構図をこう変えたい、この頁は新たに描き直したい、という画家としての欲求が湧いてきたらどうと想像するのです。また、絵本づくりとはそういうものだ、と、ぼくは理解しています。

そんなわけで、この新訳の出版にたいして、ぼくは割り切れない思いをずっといだいていました。

そんなとき、2007年2月に「ネバーランド」の「8」に今泉吉晴氏の「『くちばし』40年後の改

訳 一名作を絵本にするとき」という批評が掲載されました。この批評を読んで、ぼくの疑問の多くは氷解したのです。その第一は訳者を替えて出版したことへの今泉氏の福音館に対する疑問と批判でした。

ぼくが感じた疑問と同じような疑問を、今泉氏も抱いていたからです。でも、それよりもなによりも、ぼくが共感したのは、新訳に対しての今泉氏の動物学者としての批判の姿勢と論理でした。

今泉氏は福音館書店から「こどもに愛されたナチュラリスト シートン」の評伝や「シートン動物記シリーズ」(既刊9巻)などをはじめ、子ども向けの科学読み物多数を出版しています。これらを読んで、ぼくはとても新鮮なおどろきを覚えめました。それはものを著すときのこの著者の、その対象と読者に対する謙虚な姿勢に、とても共感を持つことができるからです。

今泉氏はシートンを書くに当たって、シートンの時代や社会的背景など様々なことを調べ、さらに、これらの時代を生きた人たちが書いたものを原書で当たり、読者の前にナチュラリスト・シートンを浮かばりにしてくれました。これはものを書くときには当たり前のことも知れませんが、同種の子どもの本の「やつつけ仕事の」な本に慣れていたぼくには、とても新鮮に写ったのです。今度のネバーランドの批評でも、変わることはないこの姿勢を強く感じたものです。

今泉氏には先の「シートン動物記」が出た機会に、静岡で講演をお願いしたこともあり、知己を得ていたので、この評論の感想をメールしました。しばらく経つと、今度は「ネバーランド」の「8」に、訳者である田中友子氏の「『くちばし』どれが一番りっぱ?」今泉吉晴氏の批判に答える」という反論ができました。この感想も今泉氏に送ったのです。

そんなやりとりの中から、今泉氏から「ピッポ新聞」でも、この問題について書いてみたいという提案がありました。

理由の一つは「ネバーランド」誌上にも再反論は書くつもりだが、出版のサイクルが長すぎるということ。 (今泉氏の批評が載って、田中友子氏の反論が出たのは1年以上経ってから) これでは読者は忘れてしまうし、問題がうやむやになってしまいかもしれないということでした。

この提案に、「ピッポ新聞」は子どもの本屋のPR紙だし、わずかしが発行部数もありませんから、器が小さすぎると思ったのです。しかし、多くの読者は『改訂版』「ピッポ新聞」で読むことが可能だと今泉氏はおっしゃるし、ぼくもある意味では「ネバーランド」誌より自由に読者は読むことができると思ってお引き受けすることにしました。

それと、お引き受けした、もう一つの理由があります。ぼくは子どもの本の世界と関わって30年近くになります。ずっと気になっていたことの1つが、子どもの本の世界では「お友だち関係」はよく目につきますが、相互批判というものがあまりないことに物足りなさを感じていました。

「批判」「反批判」というものは、質的発展のためには必要不可欠であると考えます。今回のこれが、そういう切っ掛けの一つになればとも考えました。以上が、今回今泉氏に連載をお願いすることになった経緯と理由です。

第一回の原稿を読んで、今泉氏のピアンキ文学に対する理解の深さに、いまさらながら感動しました。それに氏自身が、ピアンキを楽しんでおられる様子さえうかがえます。読者であるわたしたちも、氏の筆を通して、ピアンキとおなじようにロシアの自然を楽しめるわけです。今後が楽しみです。

ヒアンキの名著

『くちばし』

二つの版の謎をとく

動物学者 今泉吉晴

私は一昨年、ロシアの自然作家、ヒアンキの翻訳絵本『くちばし』どれが一番りっぱ(田中友子訳 2006年、福音館書店。原題は『だれのくちばしがもっといいか』)と、同じ訳者によるもう一つの翻訳絵本について、『ネバーランド』Vol.8に批評を書きました(雑誌が刊行されたのは2007年2月)。私の批評に対して訳者、田中友子氏から反論があり、また、福音館書店の書籍編集部長が「見解」を書きました(『ネバーランド』Vol.10、2008年4月)。

どちらも、私の主張のほとんどを根拠がないとするか、あるいは無視できるとしました。私から見て誤訳や、不適切ないいかえ、文章の不適切な削除、不適切な文章の付け加えの多い二つの翻訳絵本を、訳者も出版社も、そのまま売り続ける意向を表明しています。

私の批評は、翻訳のあり方を問うものでした。伊藤さんが経緯の紹介で書いてくださっています。特に『だれのくちばし』

がもっといいか』には、先訳があり、その刊行を止めたくえでの新訳の刊行でした。私は反論と見解に対して、改めて私の主張を明らかにするつもりです。当然のことながら、それらはネバーランド誌に掲載されるでしょう。

けれど、訳者も認めたいくつかの誤訳を含めて今のままで販売していてよい、という姿勢であるかぎり、本格的な改善は望むべくもありません。批評は続けても、読者からみれば、ヒアンキの作品の本当のよさは受け止めようにも受け止めようがない、という事態です。

私もまた、ヒアンキの作品に力をえて自然を見ているのですが、適切な翻訳作品がありません。そこで、これからピツポ新聞に書くことは、この新たな事態に対する提案です。

私はこの5月に、友人であるロシアの若者と4回にわたり、改めて二つある『だれのくちばしがもっといいか』の原作を読みました。私は先の批評を書くときにも、同じ友人と数回にわたり、二つの原作を読んでいますが、今回は共同訳をつくるために読みました。

『だれのくちばしがもっといいか』の日本語訳はいくつかあり、網野菊氏による1954年の訳(『だれのくちばしがすぐれているか』と、田中かな子氏による1965年の訳(『くちばし』)が、訳者の熱意が伝わってくるという意味でも、代表作といえます。これら二作品のよさを受け継いで、今の時代にふさわしい新訳を作

ろう、というのが今回の試みでした。

そして、その新訳をまずはピツポ新聞に掲載したい、と私は考えました。ピツポ新聞に訳をのせることで、本当はどのような作品であるかを早く知ってもらえ、新たな提案になり、批評にさえなります。ピツポ新聞は生き生きした批評精神をたえず発揮してきていて、二つの訳を並べて掲載してもらおうのに望むべく最高の媒体です。

さて、私が原作を繰り返し読むのは、読むたびに新鮮な感慨を覚えるからです。私にとつて、一つであるはずの作品に、二つの異なる版がある、というのは最初は衝撃であり、謎でした。私は一昨年に批評を書いた当時は、福音館書店の科学書編集セクションの編集長から、担当編集者からの私の言付けとして「文章が違ふ、もっと多くの版があるそうです」と聞かされていました。

しかし、そうではなく二つしかない、というのが私の先の批評での結論です。私は二つのうちの文章が流麗で、明らかに文学として価値が高い版を「オリジナル」とし、文章が硬くて、記述が不十分であったり、欠落していたりする版を「簡略版」と呼びました。

原作を読むたびに新たな感慨は、ヒアンキの文学の魅力の発見につながります。私は今回も、二つの版のどちらからも、ヒアンキが自然の中で鳥を見る経験を長年にわたって重ねていて、その蓄積をとおして独自の言葉づかいと文体で鳥の特徴を簡潔

に、味わい深く記述する業を育んでいる、と感じました。

ただ、簡略版では、肝心なところで独自の言葉づかいと文体が一般的な表現に置き換えられており、そのために作品の持ち味が大きく変わっています。つまり、ふたつの版の訳を読み比べることで、誰もが、二つの版があることの謎解きに参加できる、と私は確信しました。そのこともまた、私が今回の読書からえた発見の一つです。

ということでは私は、二つの版を訳して、注釈付きでピッポ新聞に掲載し、読者のみなさんが謎解きの楽しみを味わえるよう便宜をはかりたい、また、読者のみなさんの新たな謎解きから学びたい、と夢を大きくしたのです。

実は一つであるはずの作品に二つの（あるいはそれ以上の）内容の異なる版があるのは、何もビアンキの作品に限りません。日本の児童文学作品にもあることで、とうにこの問題が持つ意味に気付いておられる方も多いでしょう。けれど私は、ビアンキの原作を改めて読み直すうちに、ぼんやり気付く、という経過をたどらねばなりません。著者の独自の言葉づかいや文体を一般的な表現に修正する、ということはよくあることではないか、とふと思ったのです。

そして特に記憶に残る経験として、私が書いた科学読み物である『ムササビ 小さな森の知恵くらべ』（平凡社、1983年）が東京書籍の国語教科書に採用され、教科

書検定の制度によって『むささびがすむ町』という作品に書き換えられた時のことを思い起こし、今更ながら私の1作品にも二つの版がある、という事実に思い至ったのでした。それは強く記憶に刻み込まれてはいるものの、いやな経験であって、それゆえ思い起こすことがなかったのです。

こうして私はますます強く二つある原作の版の問題に関心を深め、二つの版の訳をピッポ新聞紙上で読者のみなさんに読んでもらえたらいい、と望むようになりました。いったいビアンキの文学の本当のよさはどこにあるのか、二つの版はそのことを、おそらくはどんな批評よりあざやかに示してくれています。

この連載では『だれの くちばしが もつと いいか』の二つの異なる版をそれぞれ全訳し、4回前後の連載で比べ読みしながら掲載していきます。比較の便宜のために、文章は節に分けてあつかい、番号をふつてあります。ロシア語原文との照らし合わせは、連載の最後にまとめて掲載します。

第一節「ヒタキ」の項

簡潔な表現に

一言で命をあたえる

優れた作品は冒頭の一節から際立っています。ビアンキは冒頭の一節で物語の主人公であるヒタキの特徴を書いて、読者に生き生きと自然の魅力を伝えていきます。もし、

『だれの くちばしが もつと いいか』

第一回 オリジナル版 訳文

第一節

- 1 ハシボソ ヒタキが木のえだにとまって あちらこちらとあたりを見はつて いました。
- 2 小さな ハエがガが やつてくると ヒタキは すぐさま ぱつと つばさを ひるげて 飛びたち・・・虫を つかまえて たべました。
- 3 そしてまた えだに もどつて じつととまり えものが とんでこないかみはりました。

第二節

- 1 近くに ハシボソ シメが いるのにきづいた ヒタキは じぶんの みじめな くらしを ベそをかきかき 話しはじめました。
- 2 ねえ と ヒタキは いいました。 食べものを 手にいれるのが つらくて つらくて いやになつてしまふの。
- 3 いちにちじゅう 休みも ゆっくりもせずにはたらいっているのにつも おなかをすかせているのよ。

動植物の図鑑に親しんでいる人なら、ビアンキの文章が図鑑の文章とよく似ていることに気付くでしょう。

動物分類学者の仕事は、ある特定の動物(あるいは特定の動物のグループ)を他のあらゆる動物(のグループ)から識別する特徴を見つけて、記述することです。それも簡潔に、一、二行の文章でやってのけます。アリストテレスは「赤い血」というたった一つの特徴で脊椎動物を他のあらゆる動物から識別して見せました。

私の手元にもとはデンマークの本だと思うのですが、『世界の鳥』(Birds of the World in Color)というポケット図鑑があつて、ヒタキ類の項を見ると、こう書いてあります。「この仲間は枝から飛び立って、空中で獲物をとらえ、もとの場所にもどってまた待つ」(Hans Hass, 1961年)。ビアンキはこの物語の冒頭で、これとほとんど同じ図鑑的文章を用いながら、ただ一語か二語、別の言葉に入れ替えることで生き生きとした、緩急のある、想像力を刺激する文章に仕上げています。

オリジナル版の

2の文章を見てみましょう

この文章を生き生きとさせているのは、「ハエカガが やってくる」と「すぐさま」という獲物の出現とヒタキの動きがほとんど同時であることの表現と、「つばさをひろげて 飛びたち」の二つです。

前者は、獲物の出現とヒタキの動きがほとんど同時であることを伝えて、ヒタキの獲物を見てとる感覚能力の素晴らしさを表現しながら、獲物とヒタキの両方を見ている観察者のパノマラの視野を表現しています。

ビアンキは、ヒタキが獲物を「追う」、という単調な言葉の代わりに「つばさをひろげて 飛びたち」という目に見えるような描写を使って、読者に生き生きした印象を与え、そのあとヒタキはどのような行動をとったのかは、読者の想像にまかせています。読者は、想像力を働かせて高速撮影の映像でゆっくり動きを追うようなあらゆる種の間合いを自らつくりながら、そこから次の「虫をつかまえて、食べる」という急な展開の言葉に移ります。

これらの言葉のつらなりは、著者が熟達の観察者であつてこそのもので、読者は観察の場面に立ち会っているかのような臨場感を覚えて、物語に引き込まれます。

くせない表現に置き換える

それに対して簡略版では、「つばさをひろげて 飛びたち」が「おいかけて」という具体的なイメージが浮かびにくい言葉に入れ替えられています。「おいかけてつかまえ のみこみました」と、目で字を追うだけで読み進んでしまいがちです。

オリジナル版のビアンキの経験を物語る生き生きした言葉を、簡略版では抽象的な一般的表現に置き換える、というこの変換

4 だって そうでしょう。 いったい
どれほどの小虫をつかまえたら
おなかがいっぱいになることか!

5 それに くちばしが とても きゃ
しゃなので たね 一つ つつけない
のよ。

6 シメがいました。 なるほど あ
なたの くちばしは 使いようがない
ね。 あまりにも きゃしゃでよ
わいから。

7 それにくらべて わたしのくちばし
は とても いい!

8 サクランボの 実のなかの かたい
からを つすい皮と おなじように
かんたんに かみくだけるんだ。

9 えだの おなじところに とまった
ままで いい。 そこから サクラン
ボを つつき

10 パチッ! ほら、われた。

11 きみにも こんなくちばしが あっ
たらいいね。

『だれの くちばしが
もっと いいか』

第一回 簡略版 訳文

(次ページ下段に続く)

のパターンは、物語の全体を通して使われます。それらすべてが合わさって生み出す全体的な効果については、これから見ていくこととなります。ここでは、二つの版の文章の性格の違いが第一節からはつきりあらわれている、としっかりと頭に入れておきたいと思えます。

さて、ここで簡略版にやや不可解な欠陥が見られます。ヒタキの獲物を捕らえる行動の大きな特徴はすべてが空中で行われる、というところにあります。その意味の言葉が「おいかけて つかまえ のみこみました」にさえられていません。

モズのように木の枝にとまって獲物をねらっているも、地上で獲物を捕らえるのは違います。図鑑の記述ではけっして落とされることのない「空中で」という、ヒタキの際立った狩りの行動の特徴の記述をピアンキが書きもらすとは考えにくいことです。

さらにまた、簡略版の3の文章は、オリジナル版の3の文章とほとんど変わらないものの、「また」という言葉が二回りかえされ、もたついた印象になっています。もちろん、これは欠陥というほどのことではありませんが、短い物語の冒頭の部分だけに目立ちます。

科学の雰囲気こそえる命名

順序が逆になりましたが、第一節の最初の言葉「ハシボソ ヒタキ」も、この物語

を特色づける、ピアンキの創意によつています。ピアンキはこの物語の登場人物である鳥のほとんどすべてに、それぞれの特徴を組み込んだ独自の名前を与えています。

このユニークな命名は、野外で知らない生きものに興味をひかれたら自分で名前をつけて呼んだらいい、というすすめでもあつてでしょう。人は生きものの名前を知らずとも、独自に生きものの特徴をつかむことができ、つぎに出会ったときに同じ生きものであるとはつきり識別する能力をもっています。

そこから一歩進めて、自分でつかんだ特徴を組み込んだ名前をつければ、それは自然を探索する道具を自らつくることになり、冒険遊びのすすめになります。

おそらくは以上のようなわけもあつて、ピアンキはこの物語に登場する鳥たちを、くちばしの特徴によつて命名しなされました。もちろん、すでにくちばしの特徴で名がつけられている鳥については、その名を使っています。名前をつけることは、科学の雰囲気を物語にそえることにもなります。したがって、この物語を翻訳するなら、日本の標準和名の命名の仕方にならつてカタカナ名にするのがいいといえます。

今までの翻訳では「細かいくちばしのヒタキ」(『だれのくちばしがすぐれているか?』の場合)といったように形容詞に訳しており、それはカタカナ名に対する抵抗感がなせるわざかもしれません。しかし、種の名(あるいは類の名)は一つの記号で

第一節

1 ハシボソ ヒタキが木のえだに
まつて あちら こちらと あた
りを 見はつて いました。
2 小さな ハエかガが 目にはいると
ヒタキは すぐに おいかけて つか
まえ のみこみました。
3 そのあと ヒタキはまた えだに
とまり また じつとまち えもの
がとんでこないか みはりました。

第二節

1 近くに ハシボソ シメが いる
のを みつけると ヒタキは じぶ
んの みじめな くらしを うつたえ
はじめました。
2 食べものを 手にいれるのが つら
くて つらくて いやになつてしま
う というのです。
3 いちにちじゅう 休みも ゆつくり
もせずに はたらいているのに それ
でも いつも おなかをすかせて
くらしています。
4 考えてもみてください。 おなかを
いっばいにするのに いったい どれ
ほどのかすの 小虫を つかまえた
ら いいか?
5 くちばしが あまりにも よわくて
たねは どんなものでも つつくこと
も できません。

もあるので、カタカナ名にして一見して種の名と分かるようにしておいた方が便利でしょう。

生きものに名前をつける仕事は分類学者のものだとされ、一般人の入り込む場所ではない、とされてきました。ビアンキの提案は分類学者がするような厳密な命名でなくとも、人はそれぞれに自然を認識していけるのだ、という勇気あるすすめといえ、今こそ大切にしたらよい提案になっています。

くちばしはもと「はし」ともいい、「はし」にはつきでたもの(あるいは半鳥のようなつきでた場所)という意味もあるということ。「つるはし」のはしも、鶴のくちばしのようにつきでた道具という意味でしょう。そこで、鳥のくちばしの特徴の記述には「はし」を使い、「はしぶと(太い嘴)」「とか「はしほそ(細い嘴)」「とか簡潔に表現できます。「ほっそりしたくちばしのヒタキ」は、ハシボソ ヒタキとすればいいのではないのでしょうか。

第二節「シメ」の項

感情のあらわれが動物の言葉

ヒタキがシメをみて、話しかけます。いったいどんなふうの話しかけたか、オリジナル版の1がビアンキの考えをよくあらわしています。

「べそをかきかき 話した」というので

す。もちろん、鳥の言葉ですから、表記すれば「ピーチク」とか「ピヨピヨ」となるでしょうが、どんな鳴き方だったにせよ、それは「べそをかき」のような鳴き方で、つまりは感情の表現だったといっています。大事なものは、鳥が話すという以上、その意味内容にかかわらず、読者はまず鳥の鳴き声をイメージし、その意味を人間の言葉に翻訳できるのであれば、こうではないかと解釈する、という手順をふむということです。

ビアンキは「べそをかきかき 話した」と書くことで、鳥の鳴き声は感情の表現であり、人は鳥の感情を理解して、そこから鳥の鳴き声を人間の言葉に翻訳できる、といったことになります。この表現の手法は動物文学の父といわれるアーネスト・トンブソン・シートンによるものです。

ここでは違う種の鳥どうしの会話ですが、ビアンキはシートンよりはるかに大胆に会話の場を広げているといえますが、それでも感情をあらわす言葉でヒタキの会話の最初の場面を描いたことの意味は大きいと思います。ビアンキはおなじ表現の手法をこの物語で繰り返し使っていますので、これ以上の議論は次の機会にします。

簡略版では、この一語を「うったえた」という通常の言葉に置き換えていて、動物の言葉の特徴をめぐり去っています。そのことよって読みやすくはなっても、大切なことが伝わらず、物語の楽しさにも影響しています。一語の変更の意味の大きさを思わされます。

6 シメがいました。 たしかに
あなたの くちばしは まったく使
えないね！
7 それにくらべて わたしの くちば
しは とても いい！
8 サクランボの 実のなかの かたい
からを うすい皮と おなじように
かんだんに かみくだけるんだ。
9 えだの おなじところに とまった
ままで いい。そこから サクラ
ンボを つついていけば いい。
10 きみにも こんなくちばしが あっ
たらいいね。

語り聞かせの表現

2の文章も、ほんのわずかの変更で物語の質が変わるほどの影響ができています。というのは、この文章はほとんど同じで、ただ一つ、「いいました」の位置が違うだけです。オリジナル版では文のはじめの方に「といいました」とあって「たん文章が切れ、簡略版では文の後の方に「といいました」とあります。

そこで、語り聞かせで読む場合には、オリジナル版では間合いをとって二つの文章に切って読み、簡略版では一つの文章として読むことになるでしょう。すなわち、「ねえ」とヒタキは「いいました」は、田中かな子氏訳による「わたしは、ねえ」

という訳を継承したものです。ここで一区切りすることで、読者は、あるいは聞き手は、いったいどんな話になるのだろう、と聞き耳をたてます。そこで、「食べものを手にいれるのが・・・」以下の文章を期待をもって注意深く聞いてもらえます。

そうであってこそ、この部分を口語的な親しめる表現にしている意味がでできます。つまり、オリジナル版の方が語り聞かせる物語らしい物語になっています。

以下、オリジナル版の 4 の最初の「だつて そうですね」が簡略版では「考えてもみてください」になっていることなど、前者では口語調のくだけた文章が多くなっています。いっぽう簡略版は、やや文語調で文法的にきちんとした印象の文章になっています。

偶然の一致かもしれませんが、前者を底本にした田中かな子氏訳による『くちばし』はやさしい印象の口語調の文章になっており、後者を底本にした網野菊氏訳の『だれのくちばしが すぐれているか?』はしっかりとした印象のやや文語調の文章になっています。

二つの版の特徴

さて、第二節の残りの部分で、オリジナル版と簡略版の新たな性格の違いがでてきます。

まず 5 の文章ですが、オリジナル版と簡略版の違いは種(たね)という言葉が前者では単数、後者では複数になっている点だけです。種は単数でも複数でも同じ意味とも受け取れますが、単数であれば単数として、複数であれば複数として訳すこともできます。オリジナル版では会話の相手はシメであって、シメが食べることができると合に大きな種をさしている、と文脈から判断できます。そこで、「たね 一つ つつけない」としました。

これに対して簡略版は複数であることから種一般をさすことになり、「たねはどんなものでも つつくことも できません」としましたが、いろいろに訳す余地があつて、あいまいです。

これまで見てきたとおり簡略版は、オリジナル版の具体性のある観察者の言葉を抽象的な一般的な言葉に置き換えることにつくられていて、文脈をつかみにくくなつており、そのあらわれと見ることもできます。

8 ～ 10 のサクランボの種を割るシーンでは、オリジナル版の 10 にある「パチッ! ほら、われた。ひとかみだ」という文章が簡略版では丸ごと削除されている、という大きな違いがあります。この文章は 8 にある「たねを いたも かんたんに かみくだける」という文章を補足するもので、噛み砕くという行為を具体的にイメージできるように

する説明の文章です。

自然の観察者がたえず求める発見とは、このような具体的な説明を意味します。いったいなぜ、そのように大切な表現を削除するのか、この問題は一つであるはずの物語の原典に二つの版があることの核心にふれるものではないか、と思えます。

今回は、物語をさらに読み進めたうえで、この削除の問題の意味を問うてみたいと思います。

(続く)

開催決定!
宇梶静江さんの講演
己野恵子さんのアイヌユーカラ

場 所 清水テルサ (6階研修室)
時 十月四日(土) 午後一時半～四時半
講演とアイヌ語の語りとユーカラ(神話)
十月五日(日) 午前九時～十二時
アイヌ刺繍のワークショップ(刺繍でユー
スターの制作を予定しています)
会費未定 (決定しだいお知らせします)

当日は、会場に宇梶さん制作の古布絵の絵本の原画を展示します。会場や準備の関係で講演会の定員は九十名・刺繍のワークショップは三十名の予定です。